

(様式 13)

氏名(本籍) 三浦 寛貴 (宮城県)
学位の種類 博士(歯学)
学位記番号 甲 第421号
学位授与日 2023年3月15日
学位授与の要件 博士の学位論文提出者(学位規程第11条第1項該当者)
学位論文題目 頭頸部屈曲筋テストと嚥下機能の関係

論文審査委員 (主査) 教授 藤澤 政紀
(副査) 教授 大岡 貴史
(副査) 教授 村本 和世
(副査) 教授 竹島 浩

論文内容の要旨

頸部屈曲筋力は嚥下機能に関連する要因の一つである。頸部屈曲筋の評価である頭部挙上運動は舌骨上筋群の評価として用いられるが、それ以外の頸部筋の活動も含まれた状態で評価されることとなる。頸部筋の過緊張は嚥下に伴う喉頭挙上の遅延を生じさせ誤嚥リスクを高めることから、頭部挙上運動は舌骨上筋群および嚥下障害の評価としての妥当性が低い可能性がある。そこで今回、頭頸部深層屈曲筋の評価として頭頸部屈曲テスト(Craniocervical Flexion Test: CCFT)に着目した。本研究は、CCFTを用いて嚥下機能と頸部筋の関連を探り、嚥下の評価に有用となりうるパラメーターとしての可能性を検討した。川越リハビリテーション病院に入院した65歳以上の高齢者66名を対象とした横断研究を実施した。診療記録より年齢、Body Mass Index、性別、診断名、Functional Independence Measure、Food Intake LEVEL Scaleの基本情報を収集した。また身体計測および身体機能計測として、下腿周径、握力、円背指数、Repetitive Saliva Swallowing Test(RSST)、舌圧、頸部伸展可動域、Genio - Sternumグレード、Activation Pressure Score(APS)を測定した。RSSTが3回以上可能であったものを嚥下機能正常群、3回未満であったものを嚥下機能低下群と群分けした。嚥下機能正常群は34名、嚥下機能低下群は32名であった。ロジスティック回帰分析の結果、握力(オッズ比: 1.12, $p = 0.03$, 95%CI = 1.01 - 1.24)およびAPS(オッズ比: 1.61, $p = 0.0005$, 95%CI = 1.23 - 2.10)が選択された。以上の結果から、頭頸部深層屈曲筋は嚥下機能において重要な要素であり、CCFTは嚥下機能に関与する頸部筋力の評価として有用となる可能性が指摘された。

論文審査および試験結果の要旨

本論文は、頭頸部深層屈曲筋が嚥下機能に及ぼす影響を検証したものである。頭頸部深層屈曲筋が嚥下機能に影響すること、またCCFTが嚥下機能評価のパラメーターになりうることが示唆され、今後の嚥下リハビリテーションの臨床応用上、極めて重要かつ意義のある内容であると思われる。

申請者 三浦寛貴に対する最終試験は、2022年10月27日、主査 藤澤政紀教授、副査 大岡貴史教授、村本和世教授、竹島浩教授により、主論文の内容、専攻学術に関する口頭試問を実施し、いずれも合格と認めた。また英語の評価に関しては大学院入学試験時の英語試験の結果をもって合格と認めた。

よって、申請者: 三浦 寛貴は、博士(歯学)の学位を授与されるに値するものと判断した。